

東信・北関東地方の縄紋中期中葉 土器の生産と流通についての予察

The Production and Distribution of Pottery during the Middle Stage of the Middle Jomon Period in Regions from Nagano Prefecture through Gunma Prefecture

小林謙一

はじめに

①土器型式組成比からみた土器の動態

②土器の実態とその理解

③折衷土器の分析

④土器型式のレベルと土器交換のモデル

まとめにかえて

【論文要旨】

本章では、土器の在地・搬入などの性格づけについての、モデルを提示する。製作物としての土器の属性を、「いつ・どこで・だれが・なにを・なにで つくったか」に区分して整理する。「いつ」は、時間の属性であり、「どこで」は空間的属性に含まれる。「だれが」は製作者、「なにを」は土器の系統、「なにで」は原料にそれぞれ関連する属性である。今回、問題とする在地土器、搬入土器の性格づけに関わる属性として、「どこで」つくられたか、「だれが」作ったか、「なにを」規範として作ったかを取りあげ、概念的に区分し、そのあり得る組み合わせをモデルとして構築した。

群馬県西部から東信地域においては、在地生産である焼町土器、在地において変形した勝坂系、同じく変形した大木系や阿玉台系土器が、それぞれ時期・遺跡によってその組成比を異にしながら、他系統共存のあり方を呈している。特に通時期的・汎地域的に主体となる土器型式が、主体的存在として卓越することはなく、強いて言えば、当該地域西側では焼町土器、中央部では勝坂系、東側では大木系・阿玉台系の比率が高くなる傾向が指摘できる。これら在地の土器に混じって、南東北地方～栃木県域の大木系土器、南関東や中部高地の勝坂系土器、越後地域の北陸系土器などが、外来系土器として搬入され、同時に在地で模倣生産されている。さらに、各系統の土器の間において、互いの要素を交換した折衷土器が作られている。これらの土器が在地なのか、搬入なのか、また在地または外地で作られたことが胎土分析などで確認されたとしても、自らのアイデンティティの共有する土器として作られていたのか、エキセントリックな欲求から製作されたのか、など多角的な視点から土器の系統を社会的システムのなかで理解しなければならない。さらにその土器がどのように製作され用いられ移動させられたのか、言ってみればいかなる社会的ニッチを持たされていたのか、について型式学的、さらには他の方面からの多様な検討を深めていく必要があろう。